

会 議 議 事 録 (抄)

会議名	専門学校東京テクニカルカレッジ 第 2 回 学校関係者評価委員会
開催日時	令和7年12月4日(木) 18 時 00 分～20 時 00 分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下 1 階 テラホール
参加者	外 部 委 員：14 名(委員の氏名・所属等は別添資料参照) 学内関係者：5名
配布資料	① 委員名簿 ② 前回(第 1 回)議事録 ③ 会次第 ④ 2025 年度 事業計画進捗資料 ⑤ 各学科取り組み資料 ⑥ その他参考資料
会議録	1. 開会の辞・事務局紹介 開会宣言 【甲田副校長】 2. 学園側関係者挨拶 校長挨拶 【白井校長】 社会構造や産業の変化が急速に進み、AI・IT の影響は非常に大きい。 アメリカにおけるキャリア転換事例(会計士→配管工で年収増)にも触れ、 専門学校がこれからどうあるべきか、どのような教育が求められるかを広い視点で再考する必要がある と述べた。 プログラミング教育の将来性、AI 時代における専門職の価値などについて意見を伺いながら、 今後の学校運営の方向性を考える材料としたい旨を述べ、挨拶とした 3. 委員紹介 各委員の紹介 【甲田副校長】 4. 議長の選出および議長挨拶 会則に則り、島田委員(エーピージーエム デザインアトリエ)を議長に選出 【甲田副校長】 議長挨拶 【島田委員】 5. 開催要件の確認 【甲田副校長】 外部委員 15 名中、出席 14 名・委任状 1 名により、会議成立を確認。 6. 議事 (1)第一号議案:前回(第 1 回)議事録の確認 【甲田副校長】 前回議事録の概要と意見の整理を報告。 主な内容は以下の通り: ・ダブルメジャー・研究科等、学科横断の学びに関する意見 ・留学生動向、退学者の傾向に関する質問 ・高等教育市場における募集環境の変化と戦略の必要性 ・通信制課程の設置方針に対する評価 ・電気工事士需要の高まり、環境テクノロジー科の今後に関する意見 ・留学生増加による教育の質や多様性への影響 ・退学率の国内生・留学生別の把握への要望 ・AI 活用リスクと AI リテラシーの重要性 ・海外研修・国際交流に関する意見 ・学校 PR、学科横断活動の広報強化に関する指摘 【島田委員】 前回議事録内容について 齟齬なし と確認。 (2)第二号議案:2025(令和 7)年度事業報告 【島田委員】 事務局へ事業報告を指示

【白井校長】より詳細な報告。

「基幹事業実施と次期計画立案」に関する報告

1) 四期制への移行

- ・学則改正・シラバス統合を進行中。
- ・2026 年度より正式導入。
- ・大学との単位互換・将来的な秋入学対応を見据えた制度設計。

2) 教育制度の改正への対応

- ・学生呼称の統一、単位制移行、自己点検義務化への対応準備。
- ・第三者評価への参加に向けた基盤整備。

3) 通信制「建築科」の設置準備

- ・夜間課程のオンライン化実績を基にオンデマンド授業を展開。
- ・全国からの問い合わせが多く、企業研修用の利用希望も寄せられている。
- ・「場所を変えずに学べる」点が高い需要を生んでいる。

4) 環境テクノロジー科の再生

- ・2026 年度の再開を目標。
- ・インフラ・プラント・ビル管理など需要が高い領域へ再編。
- ・電気・機械・化学の複合基礎を強化。
- ・企業から「共に育てたい」との意向も多数。

「共感される学校づくり」に関する報告

5) 学生募集に関する報告

- ・出願は前年より増加。
- ・ただし留学生の日本語力不足による不合格率が高い。
- ・通信制志願者の増加も目立つ。
- ・「数」は伸びているが、「入学許可数」は前年並みの見込み。

6) 高専連携に関する報告

- ・工業高校との連携授業が拡大。
- ・清水建設との共同プログラムで、実際の大型建築現場での学習を継続。
- ・大和ハウスとの新人研修受け入れも全国展開へ。

7) 留学生支援に関する報告

- ・企業奨学金制度「留学生サポーターズクラブ」を本格稼働。
- ・学費支援(例:後期授業料 40 万円)によりキャリア形成を後押し。

「自己改善できる学校づくり」に関する報告

8) 履修・授業運営と学習支援に関する報告—学生支援と課題

- ・出席率・課題未達成率の悪化傾向。
- ・特に国内生の退学率が高い。
- ・社会人訓練の離脱が多く、制度上の課題も感じられる。
- ・留学生向け日本語補講を強化(毎週金曜午後)。

9) 学修成果に関する報告—学習成果発表・イベント

- ・TTC フェスティバルを 6 年ぶりに開催。
留学生が故郷のお菓子を提供するなど国際色豊かで盛況。
- ・技能五輪日本代表選考会を学内で実施。卒業生が参加した。
- ・インテリア科による学生寮リノベーションが高評価。
- ・アメリカ短期研修は中止、建築インテリア海外研修はバルセロナで実施予定。

10) 就職活動に関する報告

- ・就職率は 86%。
- ・留学生・社会人比率の高さが影響。
- ・リカレント教育として職業実践専門課程にあらたに新科2科が採択された。

11) 「DX 社会をワクワクさせる学校づくり」に関する報告

- ・AI リテラシー授業の全学導入。
- ・専門人材未来会議を開催し、企業の最新技術動向を共有。
- ・バイオ×IoT の学科横断プロジェクトを成果化。

(5) 第三号議案: (取り組みに関する評価および意見交換)

【常井委員】

常井委員からは、まず 社会人学生と留学生の比率増 に触れ、「言語能力の影響で不合格者も一定数出ているのではないか」との見解が示された。企業の現場においても同様の課題が見られることから、言語支援の補完として AI の活用が有効になり得ると指摘。特にカルテや記録作成の場面で AI による変換支援が実際に役立っている例を紹介した。

さらに、企業とのコラボレーションは単に教育効果に留まらず、学生募集へのプラス効果もあると述べ、外部との連携強化を評価した。

これに対して白井校長からは、企業連携の重要性に同意しつつ、「資料は事前配布で対応しているが、より分かりやすい説明と情報共有を今後強化していく」との回答があった。

【澤坂委員】

澤坂委員からは、まず 退学率の内訳について言及があり、「国内生の退学が多い点は意外である」と率直な所感が述べられた。

続いて AI 教育の方向性と許容範囲 の問題に移った。

「プログラムを手で書かずに AI に生成させる事が増えている。遠くない将来、コードを書かない時代が来る。だが、AI が作ったものが正しいかどうかを判断できる能力は必須である」と述べ、AI を使うだけの技術者を育てないことが学校教育の責務であると指摘した。

さらに、「AI をどこまで教育として許容するのか、学校として線引きを示す必要がある」と述べ、方針提示を求めた。

これに対し、井坂副校長は、

- ・IT 系企業にヒアリングを進めていること
- ・現時点で“AI に置き換わる(代替される)領域”は限定的であること
- ・ただし基礎学力が損なわれない指導が不可欠であること

を説明。

また、「生成 AI の影響でアウトプット品質が下がる例もあり、納期短縮などの利点の裏側にリスクもある」とコメントし、セキュリティ面の懸念にも触れた。

「学生には AI を使わせるが、学校としての AI ポリシーを年度末(3 月)までに策定する予定であり、企業・現場の意見も踏まえて線引きを明確にしていく」と述べた。

白井校長も、「全学科で AI リテラシーの授業を実施しているが、どこまで使ってよいのか迷う部分がある。皆様のご意見を今後も参考にしたい」と述べた。

【藤沼委員】

藤沼委員からは、NEC グループでの実例が紹介された。

「AI 活用自体は推奨されているが、情報セキュリティの観点から利用するサイトが制限されている」との説明があり、教育現場でも同様の注意が必要であると助言があった。

また、退学者の扱い について問題提起があった。社会人学生が就職を理由に退学する場合、現行制度では“退学”としてカウントされマイナス評価となるが、「目的(就職)が達成されているのだから、本来はプラス評価として扱ってもよいのではないか」と述べ、制度設計の見直しを提案した。

白井校長は、「実際には“就職が決まったから辞める”ケースは表面ほど多くはない」と補足した。

【楡井委員(建築監督科・保護者)】

楡井委員は、保護者の立場から 環境テクノロジー科への関心 を述べたうえで、職場で外国籍社員を育成している経験を紹介。

大学院卒の優秀な社員であっても、言語の壁が非常に高く、8 ヶ月指導しても仕事理解が十分に進まない例を挙げ、「留学生に授業を行うことの大変さがわかる」と述べた。

また、御子息が最終面接で不合格になったことに触れ、「挫折の経験は初めてで落ち込んでいるが、良い経験でもある。学校のサポートには感謝している」と述べた。

白井校長は、「留学生が増えて苦労はあるが、それによって全体の授業の質が落ちることは許されない。質の保証は徹底する」と説明。また、御子息について「他にも良い企業は多く、引き続きサポートをしていく」と述べた。

【山本委員(環境テクノロジー科・保護者)】

山本委員からは、「高校生の頃より、専門学校に入ってからの方が学校の話をしてくれるようになった」との共有があり、学びの充実が感じられると述べた。「これから 2 年生になり将来が楽しみ」と期待を寄せた。

これに対し白井校長は、「就職についても安心していただきたい」と応じた。

【中山委員】

中山委員からは、学校運営全体への理解を示しつつ、

「AI との向き合い方は今後も継続的に課題となる」とのコメントがあった。特に、

- ・AI そのものを学ぶのか
- ・AI の活用方法を学ぶのか

という 学習目的の違いが教育方針を左右する と指摘し、「学科ごとに AI をどう使うかを示すことで、学びのイメージがよりクリアになり、学生に安心感を与えられる」と述べた。

白井校長は、「AI を使うことで“考える力”が削がれないよう、どこまで使わせるかを慎重に判断したい」と応じた。

【杉山委員】

杉山委員は、学園祭の復活を非常に評価した。

学校選びにおいては、就職実績だけでなく「面倒見の良さ」や「学生生活の楽しさ」が大きな判断基準になるとして、かつて実施していた仮装大会のような要素を含む行事の継続を望む旨を述べた。

白井校長は、「学びと遊びの線引きを考えながら、学生が楽しめる環境づくりを続けたい」と述べた。

【佐々委員】

佐々委員は、通信制課程のスクーリングの価値を強調し、「仲間ができることは大きな力になる」と述べた。

また、留学生支援について、小山学園全体としてサポートする仕組みがあるとよいのではないかと提案。

さらに、「就職活動の実例から保護者の思いが伝わり、TTC は保護者に支えられている学校だと感じた」とコメントした。

白井校長は、スクーリングの重要性に同意し、「留学生支援についても全体として検討を進めたいが、どこまでできるかは試行錯誤」と述べた。

【板倉委員(杉岡委員代理)】

板倉委員からは、4 点の意見が示された。

① 留学生採用の難しさ

企業側が消極的であることが多く、「トップ層留学生の良さを知る機会が乏しい」と問題提起。今後連携して取り組む可能性を示した。

② AI と人の役割

新卒で AI 活用が当たり前の層が増えており、少し課題が変わると対応できない例があることを説明。

ゲーム会社の例として「AI は整った成果物を作れるが、“触りたくなる魅力”や“間の表現”などの機微は生み出せない」と述べ、AI と人間の分業が鍵になると指摘した。

③ 大学生との比較問題

文系大学生が専門学校生と競合する場面が増えていると述べ、技術系専門学校の強みを高校や企業にもっと伝える必要があると提案。

④ 募集広報の効果

現在どの取り組みが最も効果的であると捉えているか質問した。

ここに対し澤坂委員からも補足意見があり、

・多くの企業が留学生採用に慎重である

・トップ層の留学生は大手企業に取られてしまい、中堅以下は支援体制が整わない

など現状の壁について共有された。

白井校長は、

「優れた留学生の事例を積極的に発信していく必要がある」

「AI でできる部分と、人がやるべき部分を教育でどう示すかは非常に重要」と述べた。

また募集については、

「通信制の問い合わせが地方から急増している。東京に集中しすぎず、地方企業と連携し、地域に還元する道を模索している」と方向性を説明した。

【松本委員】

松本委員は、通信制高校から進学した学生の退学率の高さに触れ、「大学では通常 2～3%だが、通信制高校出身者は 20～30%に跳ね上がる」というデータを示した上で、専門学校の退学率の情報は詳細がないものの「大学より低いのではないかと推測した。

さらに、TTC の特徴として、

退学希望者への支援が手厚く、退学までのプロセスが長い点を評価し、通信制高校教員や保護者への情報提供に活用したいと述べた。

【三浦委員】

三浦委員からは、通信制建築科への問い合わせ状況について質問があり、白井校長は「高校生からの問い合わせは非常に少なく、夜間制は関東圏中心だったが、現在は沖縄や台湾など海外からも問い合わせがある」と説明した。

また、「大学の単位制では科目を落とすと学費返還訴訟があったが、TTC ではどうか」という質問があり、

白井校長は、専門学校は必修科目中心のため「1 年で落とした科目を翌年に取るのは困難」であり、単位制・四期制導入後も基本構造は変わらず「学年留年・科目留年の扱いになる」と説明した。

【吉田委員】

吉田委員からは、留学生・社会人・AI といった複雑な課題が同時に押し寄せる中で、「教員はどのように対応しているのか」「学校として教員負担にどう対策しているのか」との質問が挙がった。

白井校長は、

「確かに教員の負担は増えており、複数のチャンネルを設けて情報共有し、組織的な対応を進めている」と回答。井坂副校長は、

・留学生対応は自転車操業に近い苦労があること

・学科間で情報交換し、場当たりではなく改善を進めていること

・日本語学校の講師を招き、N3 レベルでも理解が難しい語彙を AI で抽出し授業に活用する取り組み

	など具体例を挙げた。 【岸委員】 岸委員は、ダブルメジャーや企業連携の効果の検証が必要であると述べた上で、「学生像がどう変化しているのか、追跡調査が重要である」と提案した。 また、自身が留学した経験から、「言語は本来、本人が努力して身につける部分であり、どこまで学校がフォローするのか疑問をもつ部分がある」との見解を示した。 白井校長は、「努力しても一定ラインに届かなければ進級・卒業は難しいが、人材不足の社会状況を考えると、外国人材の育成は学校としても応えるべき使命であると感じている」と述べた。 【島田委員】 島田委員からは、「TTC は立体的な取り組みが多く、学園祭の復活も学校の価値を外に開く良い機会となった」と評価があった。 特に、留学生教育では 日本語能力が学力と強く関連する と述べ、「伝え方の工夫や分かりやすい言い回しを、非常勤を含む全教員で共有できればよい」と提案した。 7. 閉会の辞 【甲田副校長】 次回委員会開催予定と、2026年3月7日(土)の卒業研究・制作および RJP の学修成果発表会と夕刻の「よるテラ」開催予定を案内し、閉会した。 以上
--	---

議事録署名人

印

印